

『ティファニーで朝食を』のタイトルの象徴性  
—ホリーの自由という牢獄とカポーティの救い—

飯島 昭典

## はじめに

I am always drawn back to places where I have lived, the houses and their neighbourhoods. For instance, there is a brownstone in East Seventies where, during the early years of the war, I had my first New York apartment. (9)<sup>1</sup>

私はいつも自分が住んでいた場所にひきつけられる。家々とその近所。例えば、イーストエンドの72丁目のブラウンストーンの建物。戦争の早い時期に、私はそこで自分ではじめてのニューヨークのアパートを借りていた。

思い出の描写から始まるこの小説は同時に場所への言及も行われている。主人公のアイデンティティの探求、作者トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-84) の存在意義を探し続けた波乱万丈の人生、そして語り手である「私」(“I”)(9)の職業作家としての確立への努力時代、つまり地位と職業の確立のための青春の自分探し、等この冒頭の描写は『ティファニーで朝食を』(*Breakfast at Tiffany's*, 1958)の内容を示唆するのに非常に意味深長な切り口であると言っていいだろう。思春期後期の少女を主人公にした捕らえどころのない登場人物作りや作者カポーティとイメージが重なり合う登場人物「私」の登場、そしてミステリアスな物語展開によって、『ティファニーで朝食を』の人気は出版後50年以上たった今でも衰えることはない。ハリウッドによる映画化の影響のみならず、この作品の人気を支える秘密がいくつもあるに違いない。ペーパーバックで100ページにも満たないこの作品には、魅力が溢れるばかりに存在するのである。

昨今の批評理論の中で作者の伝記的事実に注目するのは、時代遅れの非難を浴びそうであるが、伝記的アプローチは批評理論の基礎の一つとしていまだに

有効であると私は信じている。そして現代批評理論の姿とは、もともとあるいくつかの基礎的な批評アプローチの亜流、あるいはそこに含まれてしまうということが間々あるのである。ここでは伝記的なアプローチである作者の伝記的事実を私の論文の切り口としたい。

満たされない愛情への渴望とその探求。これは作家カポーティを表すのによく使われる言葉である。カポーティが4歳の時に両親は離婚し、その母も29歳の時自殺をしてしまう。父親は口先だけの家庭を顧みない軽薄な男であり、母親は息子を部屋に閉じ込めたまま、男遊びを繰り返すというような両親であった。このような状況の中で、カポーティは孤独感をつのらせ、後に人間不信、女性不信、そして同性愛、酒、麻薬と誤った道に陥っていったのは、想像に難くない事であろう。ヘレン・ガーソン(Helen Garson)が言うように、カポーティは「自分を決して見捨てない人」(“the one who would never abandon him”)(10)に飢えつづけた作家である。一人の人間にとって幼少期の経験が残りの人生に大きく影響を及ぼすのは、多くの心理学者が指摘する通りであり、またこれは今や一般に知られた周知の事実ではないだろうか。

詩的で繊細なタッチで描かれた『ティファニーで朝食を』は、「覆い隠され緩やかに自伝的な物語であり、ある程度作者の個人の歴史を反映した」(“veiled, loosely autobiographical tales that reflect to some limited extent the author’s personal history”)(123)作品であるとケネス・リード(Kenneth Reed)は述べているが、私自身も主人公ホリー・ゴライトリー(Holly Golightly)<sup>2</sup>の自身の所在のなさやアイデンティティの探求、そして語り手である「私」の職業が作家であるといった事実からも、この作品はカポーティの自伝的要素を多分に含む作品であるという印象をぬぐいきれない。

作品中の登場人物を作者と無批判に同一視してしまうのは、危険なことであ

るが、ここでは自由を求めるホリーが実は、自分のアイデンティティを見出せない彷徨い歩く人間であるという点と、カポーティ自身が得られない愛を生涯求め続けた、やはり彷徨い歩いた人間であるという共通項のもと、私なりの『ティファニーで朝食を』論を展開してみたいと思う。作品タイトルの「ティファニー」とは女性の憧れ、ニューヨーク 5 番街にある高級アクセサリー店の名称である。この作品タイトルは物語の展開からすると少し取ってつけたような奇妙な感じがするのは、私だけであろうか。取り巻きの男たちに囲まれ、したたかに男たちの間を縫うように生きる主人公である。弟の戦死や自分の逮捕、そして子供の流産、南米への旅立ち、そしてアフリカへの彷徨等およそ作品タイトルである『ティファニーで朝食を』にはふさわしくない物語展開なのではないだろうか。なぜカポーティは自身の作品に『ティファニーで朝食を』というタイトルを付けたのであろうか。ここには何らかの作者の意図が隠されているはずである。このタイトルの意味を明らかにする事が、このペーパーの目的である。

## 1. ホリーの自由とその代償

主人公ホリーは一体どんな人間なのであろうか。ホリーの持つ名刺「旅行中」(“travelling”)(16)が示すように彼女は自由を表す人物である。作品の構成を考えても、10数年前を回想し、彼女の思い出を語るという形式はホリーに非現実感を与えるものとなっている。彼女の年齢は実際は19歳であったが、これは後にわかった事である。「子どもというわけではないが、女にはなりきっていない。16から30のいずれかに思えた」(“It was a face beyond childhood, yet this side of belonging to a woman. I thought her anywhere between sixteen and thirty”)(17)というような風貌で、この様子もホリーの現実感のなさを表す描写の一つとっていいだろう。

こうした現実感のなさは、彼女に流動的で固定しないイメージを与えているのである。

彼女はハリウッドスターになる可能性を自らつぶしてしまうという経験をしている。ホリーは、自分自身の人生のチャンスを捨ててしまったわけである。職業を得て、生活を安定させるというアイデンティティの確立を、言わば放棄したわけである。ホリーはかつて語り手の「私」との会話で、部屋の惨めさをあからさまに非難する。「まあ、何にでも慣れるものだよ」(“ Oh, you get used to anything ”) (22)と返事する「私」に彼女は、次のような発言をしている。

‘ I don’t. I’ll never get used to anything. Anybody that does, they might as well be dead. ’ (22)

「私は違うわよ。何ににも慣れないんだから。そんな事する人って死んでも同然よ」

彼女にとって慣れる事は死ぬことであり、アイデンティティの確立はホリーにとって死を意味することなのである。カメラテストを放棄したホリーは、自らアイデンティティの確立を放棄したと同時に、自らの死を放棄したと言っているだろう。彼女は決して確立とか固定といったものを信じないのである。彼女がよく歌う「眠りたくない。死にたくもない。ただ空の牧場を彷徨い続けたい」(“ Don’t wanna sleep, Don’t wanna die, just wanna go a-travellin’ through of the sky ”) (21)と言った歌詞にもホリーの不確実性は表されているのである。O. J. バーマン(O. J. Berman)は、カメラテストをすっぽかしたホリーについて「彼女は自分の信じているまやかしを、心から信じている。そしてそこから引きはがす事は誰も出来やしない」(“ She believes

all this crap she believes. You can't talk her out of it”)(32)と説明するが、ホリーの信じているものとは、不確定さなのである。言い方を変えれば、アイデンティティの不確定が彼女の自我なのである。自由、非現実、不確定さがホリーを表す形容詞なのである。

こうしたホリーであるが、彼女は作品中の表面的な扱いの通り、自由気ままな人物なのであろうか。どうやら違うようである。彼女の生活は自由なものであるが、それは言わば、自由の刑に処せられた自由人の生活であり、心の安定をもたらすものではない。「彼女は生まれながらの嘘つき」(“She's such a goddamn liar”)(34)として周囲の人間を欺き続けるが、彼女は実は自分自身をも欺き続けているのである。「自己欺瞞はホリーの欠点の一つではない。たとえ彼女は並外れた嘘つきであるとしてももある」(“Self-deception is not one of Holly's failing, although she is an extraordinary liar”)(Garson 82)と評した批評家がいるが、果たしてそうなのであろうか。

彼女は確かに不確実を好み実際それを求め続けている。しかし、彼女は無意識的に心の内奥では、心の安定を求めているのである。「私」に対して弟の名前であるフレッド(Fred)と呼ぶのは、彼女が家族を大切にす気持ちから出た呼び方であるし、弟の戦死を知って錯乱状態で部屋を暴れまわる彼女の姿は、肉親を失った悲しみと同時に、自分自身の心の安定、住処を失った孤独感からの行動である。彼女は不確定を求める心と、安定を求める心の間で揺れ動く少女なのである。周囲の男をだまし、自分の傍に置き続けるのも、彼女にとって生きる糧であると同時に人とつながってほしい、一人にはなりたくないという無意識の心の表れなのである。

自分の飼っている猫に対して次のような発言をするホリーである。

... ' poor slob without a name. It's a little inconvenient, his not having a name. But I haven't any right to give him one: he'll have to wait until he belongs to somebody. We just sort of took up by the river one day, we don't belong to each other: he's an independent, and so am I. I don't want to own anything until I know I've found the place where me and things belong together. (46)

名前がないなんて可哀そうな間抜け。名前を持っていないのは少し不便ね。でも私に名前を付ける権利はないわ。誰かに飼われるまで、この猫ちゃんも待たなければならないわ。ある日、川べりで私たちは偶然出会ったの。お互いに誰のものでもない。猫ちゃんも私も独立している。自分と他の物がちゃんと一つになる場所を見つけたと分かるまで、何にも私は欲しくくないわ。

幼い孤児として拾われた自分と、居場所のない存在としての猫が重なり、彼女はこの猫をペットとしているのである。自分の心のありかを見つけるまでは、何も欲しくないし、不確定のままでいたい、とする彼女の心が読み取れるが、裏を返せば彼女は早く心の充足という心の在り処を見つけないのである。南米へと旅立つ時に猫を彼女は捨てていくが、この行動は自分の分身である猫との別れ、つまり根なし草的な存在からの脱却を図るホリーの意識の表れとする事が出来るのである。彼女は新天地での新しい生活を期待しての行動であり、心の安定を目指す行動の一つである。

このように考えると、上に挙げた批評家のホリーは自己欺瞞を行っていない、というのは少し見当はずれなのではないだろうか。彼女は自分でも意識せずとも心の安住を求めているのである。その心に反して彼女は不確定を求め続け、

自由という嘘を己に対してつき続けているのである。彼女は自分の本当の心が見えずに自己欺瞞を続ける主人公なのではないだろうか。彼女のトレードマークであるサングラスは、度付きのものである。彼女のサングラスは自分の心の真実を見ようとしなない、あるいは見る事が出来ないホリーの心象を表しているのである。度付きのサングラスをかけていない時のホリーの「何かを判断しているような目」(“ an assessing squint ”)(22)とは、自分の生き方を判断し続け、もがいている姿を表す表現である。もがいている姿に蓋をするサングラスは安定を求めながらも、不確定な生活を続けるホリーの自己欺瞞を暗示する象徴なのである。サングラスはホリーの自己欺瞞の象徴的アイテムである。以上のようにホリーは自由でありながらも、実は心の内は安定していないという、自由であるがゆえの苦しみに、無意識ながら身を置いている主人公である、という事が出来るのではないだろうか。つまり、自由に囚われ、自由の刑に処せられた登場人物なのである。

## 2. カポーティのホリーへの救い

しかし、このような自由に身を置くホリー、あるいは放縦の中に身を置くホリーに対してカポーティは救いを与えていないのだろうか。そんな事はないはずである。ここで視点の工夫を考えてみたいと思う。この作品は語り手である「私」が昔を回想して語るという構成の上に成り立っている。ホリーがブラジルに旅立ち、そしてアフリカに渡ったという情報を手にする「私」であるが、決して真実を知る事はない。ジョー・ベル(Joe Bell)の話によって、どうやらホリーはアフリカで生活しているという噂を知るだけなのである。破天荒な生き方を続けてきたホリーの現在は、落ち着いたものになっているか、あるいは悲惨なものになっているか、決して知る由はないのである。木彫りの彫像<sup>3</sup>がホリーに似ているという事実から、ホリーの現在の様子をうかがい探るとい



う展開になるのである。

この点において、現在のホリーは「私」の思い出と相まって、一種象徴化された存在になっているのである。実際の確実な情報による推測ではなく、ある意味神秘性を掻き立てる憶測から彼女の現在を予想しているのである。ホリーに対して必ずしも否定的な判断を下しているカポーティではないのである。作品終末部分で語り手の「私」は、ホリーの飼っていた猫について以下のような説明を与えている。

But one day, one cold sunshiny Sunder winter  
afternoon, it was. Franked by potted plants and framed by  
clean lace curtains, he was seated in the window of a  
warm-looking room: I wondered what his name was, for I was  
certain he had one now, certain he'd arrived somewhere he  
belonged. African hut or whatever, I hope Holly has,  
too. (100)

でもある寒い日の出た冬の日曜の午後、猫はいた。鉢植えの植物に体をくっ付け、きれいなレースのカーテンに身を縁どられていたのだ。猫は暖かそうに見える部屋の窓に座っていた。名前がなんであるかはわからないが、今ではきっと名前が付けられて、居るべき場所のどこかで身を落ち着けているはずだと思った。ホリーもアフリカの掘っ立て小屋であれ、何であれそうあって欲しいと思う。

この猫は、本ペーパー中に述べたとおりホリーと一体をなす猫である。ホリーと猫が似たような存在であり、それによってホリーがこの猫に対して愛着を持ち、自分と同一視したものなのである。このホリーと一体をなす猫は、今は、自分の居場所を見つけ名前が付けられているはずである、という判断を「私」

はしているのである。猫の説明の後にすぐにホリーを引合いにだし、ホリーも居場所を見つけていて欲しいという「私」の願いからも、この場面は作者カポーティによるホリーへの救いを示した箇所と言えるのではないだろうか。

ホリーは他人を求め続け、変化を求め続ける生活を送ってきたが、イハブ・ハッサン(Ihab Hassan)はこうした行動を次のような言葉で説明している。ホリーは変化し続けているが、「他者への探求は、それが神であれ、恋人であれ、父親であれ、結局自己の発見につながるものである」(“ The search for the other, who may be god, sweetheart, or father, ends in the discovery of the Self ” ) (53)。つまり男遍歴を続け、変化し続けるホリーの行動は、結局自己発見の行動と言えるのである。自由という牢獄に囚われているものの、その目指すところは自己発見につながっていくというハッサンの説明なのである。<sup>4</sup>

ホリーが旅立ったアフリカでさえ、希望の光とも考える事が出来る。アフリカは言うまでもなく、人類誕生の地であり、人間の源泉の土地である。この原初の土地への旅立ちは、ホリーの存在価値の根本である、アイデンティティ探求の象徴とも考えられるのである。自分が一体どこに属すべきで、何をすべきなのかをはっきりさせるために、人類誕生の地、文明誕生の地であるアフリカへと旅立ったのである。人類と文明の誕生の地であるアフリカへの旅立ちは、ホリーの存在価値の源泉である自己発見への行動なのである。

作品中の「私」、主人公ホリー、作者カポーティを同一線上に考えるのは危険なことであろうか。「私」はホリーと一緒に過ごした日々というのは、まだ無名の作家志望の青年であった。しかし、文脈から現在の「私」はどうやら作家として生活を営んでいるらしいことが分かるのである。カポーティが「私」に自身を重ね、そして自分の不遇な子供時代の投影としてホリーを作り上げたというのは、それ程見当違いの推論ではないはずである。ガーソンはカポーテ

ィとホリーの類似性について以下のような説明を挙げている。

Like Holly, Capote wanted “ permanence and stability, ” but in actuality Capote, like Holly, became something of a wanderer, a man who lived in many places in the world. Even though in his 20s he found a lifetime companion, Capote always considered himself as family-less and homeless wanderer. (88)

ホリーのようにカポーティは普遍性と安定を求めた。しかし実際にはホリーのように放浪者、つまり世界中のあちこちを転々とする男となったのだ。20代で生涯の仲間となる者を得たが、カポーティは自分自身を常に家族のいない、そして家庭のない放浪者であると考えていた。

カポーティと「私」、そしてホリーは何らかの形で重なり合っているのである。この「私」は今や、夢を実現させ、作家としての職業についている。この「私」が書くホリーの思い出は、懐かしさを感じさせる文体であり、ホリーについては自分の居場所を見つけてほしいという願望を「私」は持っているのである。上記までの説明でわかるように、カポーティは「私」を通してホリーに対して何らかの希望を与えている、あるいはホリーが自分の居場所を見つけて幸せを手に入れている、というような期待を感じさせるような描き方をしているのである。自由にとらわれ根なし草的な生活を送る主人公に対して、希望を与えているのである。成人に達していない年齢という設定でさえ、未来を感じさせる可能性を与える状況設定なのである。

## 結論

『ティファニーで朝食を』には様々な構成上の工夫がなされている。ジョー・ベルの店で「私」が見た写真に写っている木彫りの彫像は、ホリーに原始的で空想的な特徴を与える、なにか象徴的なイメージとして作品中で使われているのである。こうしたことにより、木彫りの彫像はホリーのイメージと重なり全ての男性の感情に訴える象徴的アイテムになっている。ホリーはこの事により、一種象徴化され、非現実、何ものにもとらわれない自由のイメージを増幅させることになるのである。現実感のなさとは容易に結びつくイメージではないだろうか。現実という既成概念からの自由と超越が非現実だからである。現実に囚われているのであれば、それは非現実とは言えないのである。

そして自由と反対のイメージとして使われており、ホリーの旅行中の名刺やホリー・ゴーライトリー、つまり「休日にのんきに行く」の名前のしめすイメージとは対極に位置するのが鳥かごの役割である。ホリーは鳥かごには決して生き物を入れないでと頼む。ホリーにとって鳥かごとは、自由の喪失を表すものなのである。鳥にとって自由を妨げる鳥かごは、ホリーにとって自由を阻害するものとしての印象を与える。それゆえ、ホリーは生き物を決して入れないでと頼むのである。このように作品中ではホリーに対して自由のイメージを与える工夫が随所に隠されている。

この自由がゆえに苦しみ、自分を見出せない主人公ホリーにカポーティは救いを与えていることを本論文中で示した。そろそろここで、本ペーパーの論題であるなぜカポーティは『ティファニーで朝食を』というタイトルを付けたのかという問いに答えを出してみたいと思う。ここまでの説明で明らかになったはずである。それは自己発見の過程にある主人公ホリーに対してのカポーティによる希望を表現しているのである。ホリー自身がティファニーという光り輝く場所で、希望の朝を迎える事を期待しているのである。そのホリーにとってのティファニーとは必ずしも高級感あふれる贅をつくした場所を指すのではな

い。それは、ホリーにとってのティファニーであり、自分の場所であり、幸せを見つけられる場所である。まったく月並みの生活であっても構わないのである。幸せを見出せる場所でありさえすれば、たとえ平凡な生活であっても、それは彼女にとってのティファニーという豪華絢爛な場所なのである。客観的な富による物差しではなく、ホリーの幸せという内面の裕福さを期待するカパーティの希望なのである。そしてそのホリーにとってのティファニーは朝という活動の開始の時間であり、そこからホリーの真の幸せな人生が始まるという期待が込められているのである。波乱万丈の生活を送りながらも、作家として生活したカパーティが示す弱き者への理解と希望、懐かしさ、そして自分自身をホリーに重ねた未来を期待させるタイトルになっているのである。なお本論文中では示さなかったが、1950年代の政治的コンテクストによる読みや、作品中で最小限度に抑えられたセクシュアリティの表現とやはり1950年代の女性のステレオタイプのイメージの類似点、相違点などは、今後の研究の新たな視点となるのではないだろうか。

## 注

1. 本論文中、『ティファニーで朝食を』への言及は、Truman Capote, *Breakfast at Tiffany's* ed. Hamish Hamiltons に拠る。
2. この主人公の名前、Holly Golightly (休日にのんきに行く) の暗示は自由さと共に軽さも感じさせる。これは作品の文体とも重なる要素であり、主人公の軽妙さをより強く印象付けるものである。
3. 人形と性的イメージはしばしば、重なり合う。たとえば、エジプトでは死者の囲い女として人形が埋められたが、それは死者が性を楽しみ、性的（豊穡）弱化を防ぐためである。またエリザベス朝演劇『ヘンリー4世』では、娼婦の通称とされている。作品中でのホリーは一種セクシュアルなイメージが付きまとうが、この木彫りの彫像においても彼女のこのイメージを印象づけるように思える。
4. この考え方には、私自身も賛成するところである。自己認識とは他者との関わり合いによって、発見されるものがある。自分が他人との関係によって、どのような人間なのか、どう位置づけられるのか、ということは自己発見の必要条件の一つではないだろうか。

引用·参考文献

- Aldridge, John W. “ The Metaphorical World of Truman Capote. ” *The Critical Response to Truman Capote.* Ed. Joseph J. Waldmeir and John C. Waldmeir. London: Greenwood Press, 1999. 37-48.
- Capote, Truman. *Breakfast at Tiffany's.* Ed. Hamish Hamilton. New York: Penguin Books, 2000.
- Christensen, Peter G. “ Capote As Gay American Author. ” *The Critical Response to Truman Capote.* Ed. Joseph J. Waldmeir and John C. Waldmeir. London: Greenwood Press, 1999. 61-67.
- Clarke, Gerald. *Capote: A Biography.* London: Cardinal, 1988.
- Fiedler, Leslie. “ Capote's Tale. ” *The Critical Response to Truman Capote.* Ed. Joseph J. Waldmeir and John C. Waldmeir. London: Greenwood Press, 1999. 79-80.
- Garson, Helen S. *Truman Capote.* New York: Frederick Ungar Publishing, 1980.
- — —. *Truman Capote: A Study of the Short Fiction.* New York: Twayne Publishers, 1992.
- Hassan, Ihab H. “ Birth of a Heroine. ” *The Critical Response to Truman Capote.* Ed. Joseph J. Waldmeir and John C. Waldmeir. London: Greenwood Press,

1999. 109-114.

Hassan, Ihab H. "The Daydream and Nightmare of Narcissus."  
" *The Critical Response to Truman Capote*. Ed.  
Joseph J. Waldmeir and John C. Waldmeir.  
London: Greenwood Press, 1999. 49-60.

Levine, Paul. "Truman Capote: The Revelation of the Broken  
Image." *The Critical Response to Truman  
Capote*. Ed. Joseph J. Waldmeir and John C.  
Waldmeir. London: Greenwood Press, 1999.  
81-93.

Reed, Kenneth T. *Truman Capote*. New York: Twayne Publishers,  
1981.